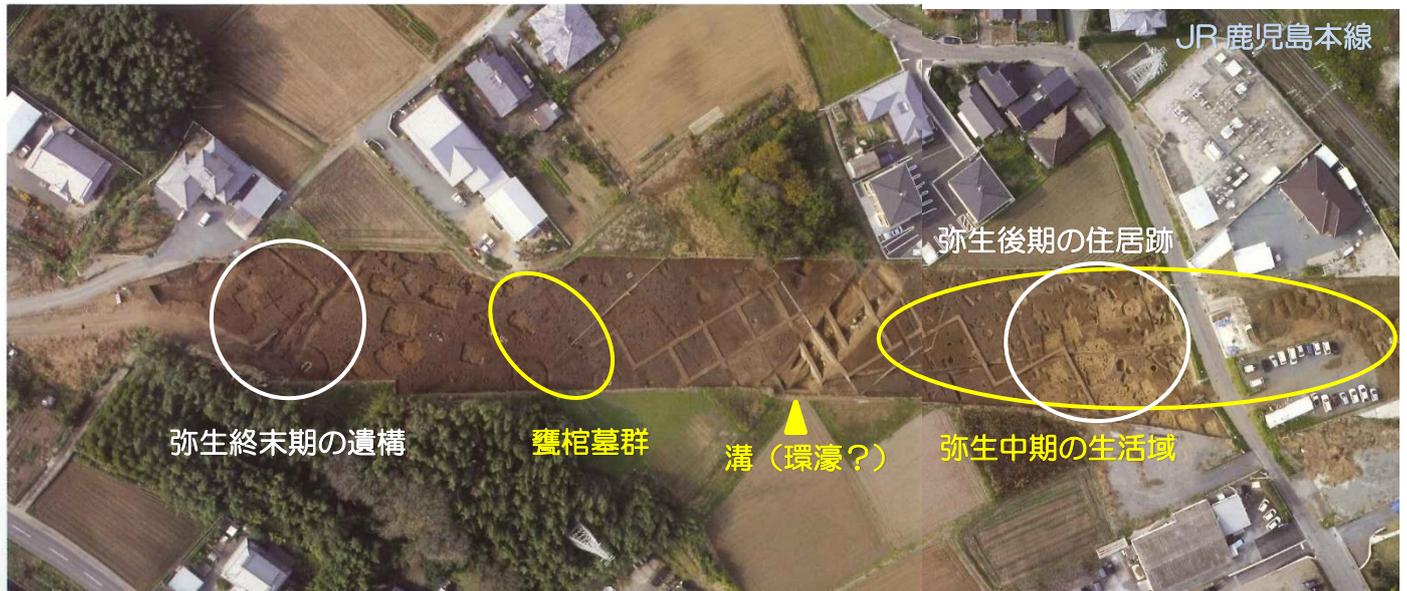


塚原遺跡

～弥生時代編～

【お問い合わせ】

玉名市教育委員会
文化課文化財係



～市道岱明玉名線建設に伴う発掘調査成果～

令和3年6月に全面開通した市道岱明玉名線の建設工事に伴って発掘調査を実施しました。この路線の中央から北側は弥生時代を中心とした塚原・木船西・大原遺跡の範囲に含まれています。平成22年度から平成24年度にかけて発掘調査した塚原遺跡の概要を報告します。

■弥生時代中期

～県内最大級の大型円形建物跡や甕棺墓群、それらを区画する溝

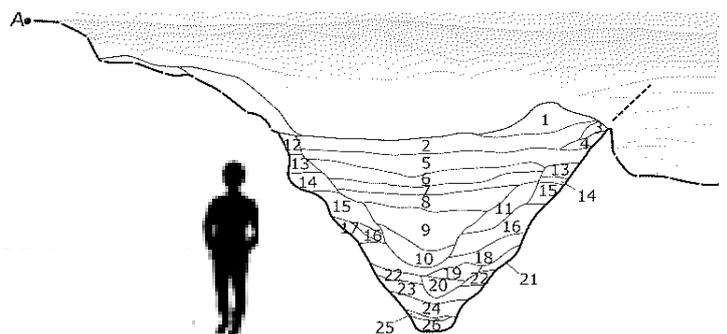


▲大型円形建物跡 (S111) と石鏃など

調査区北側においては、弥生時代中期の大型円形建物跡が6基確認されました。そのうち S111 は直径が 11m もあり県内最大級です。

塚原遺跡の場合、円形の大型建物から石鏃や剥片が多量に出土していることから、石器製作の工房（作業場）の可能性も考えられます。

▼調査区の中央付近には、幅 5m、深さ 2.5m の溝があります。北側の生活域と南側の墓域を分ける溝とみられますが、断面が V 字形をしていることなどから防衛的な役割もあったと考えられます。



塚原遺跡の V 字形の溝と当時の弥生人の大きさ



塚原遺跡出土の甕棺墓 (S351)

約2000年前の
弥生人じゃ！



塚原遺跡出土の甕棺墓(S363)

溝の南側は墓域だったとみられ、弥生時代中期の甕棺墓が21基検出されました。これらの甕棺は帯状に集中しており、東側では大型棺を中心に南北方向の2列に配置されています。このうち2基の甕棺は人骨が良好に残存しており、調べた結果、いずれも熟年の男性で高身長ということがわかりました。

■ 弥生時代後期～終末期

～変わる住居スタイル、そして古墳時代へ～



弥生時代中期 (S17)



弥生時代後期 (S194)

ベッド状遺構

塚原遺跡における住居形態の変化

弥生時代後期になると、住居の形態が円形から方形へと変化します。後期の竪穴住居跡は8基確認されました。いずれも東西方向に長く、中央に炉、それを挟むように2本柱という形で、壁際にベッド状遺構を持つという共通性があります。また、南側が入口だったと考えられます。

弥生時代終末期の遺構と遺物

調査区南側では、弥生時代終末期の竪穴遺構、溝などが確認されました。

こんな土器も出たよ！



S141 出土の土器

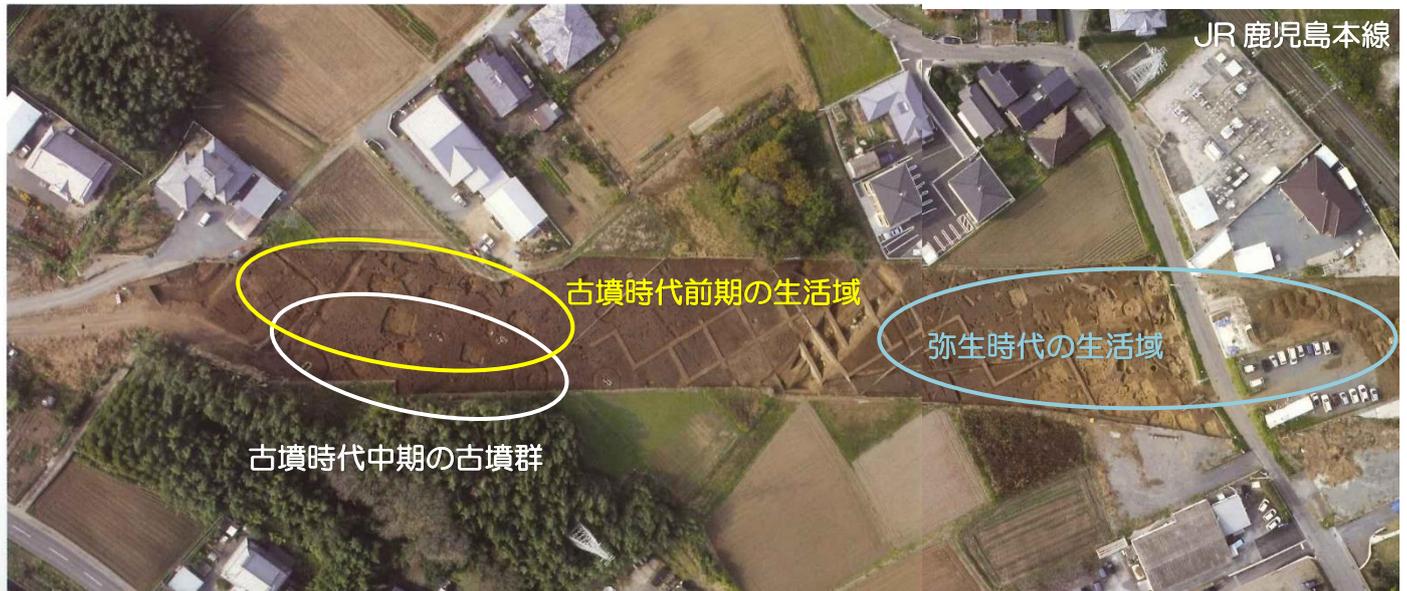


竪穴遺構 (S141) の土器出土状況



溝 (S136) 出土の舟形土器

古墳時代編へと続きます…



塚原遺跡は、主に北側が弥生時代中期から後期の生活域でしたが、古墳時代になると南側に生活域が変わり、中期になると古墳が築造されるという変遷がわかります。

■古墳時代前期

～弥生の住居スタイルを引き継ぎ、鉄器を多く有する集落～



竪穴住居(S192)から出土した多量の土器



竪穴住居(S192)出土の土器

調査区南側においては、古墳時代前期の竪穴住居跡が 14 基確認されました。その形態は、弥生時代後期とほとんど変わらず、2本柱にベッド状遺構をもつというスタイルでした。

住居跡からは鉄器も多く出土しており、特にS197からは約70点もの鉄器（鉄鏃・刀子など）が出土しています。また、S360からは滑石製の勾玉やガラス玉が検出されなど、集落の性格を考えるうえで注目されるものです。



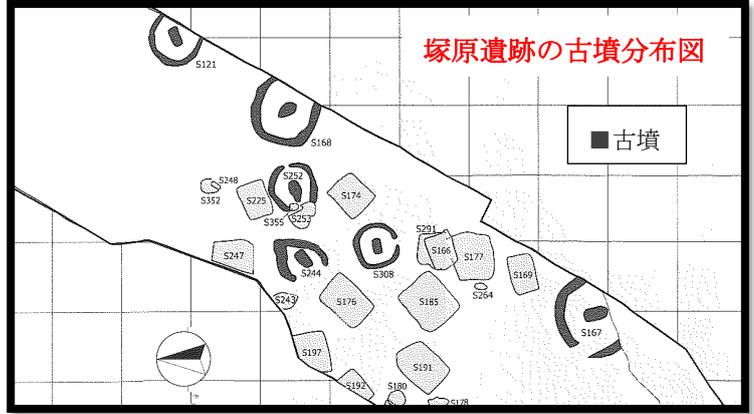
竪穴住居跡 (S360) 出土の勾玉

■古墳時代中期

～菊池川下流域初の石棺系石室をもつ古墳群～

古墳時代中期になると、調査区南側に古墳群が形成されます。全体で6基の円墳が検出され、うち2基は主体部が消失していましたが、他の4基は「石棺系石室」を主体部としており、菊池川下流域では初の発見例となりました。いずれも盗掘を受けていましたが、副葬品として鉄器（鉄鏃・刀子）や玉類（滑石製白玉・ガラス玉）が出土しました。これらの古墳は、周溝内出土の土器から5世紀中頃に築造されたと考えられます。

「石棺系石室」とは？
北部九州を中心に分布するもので、県内では山鹿市や宇土市などで確認されています。



S121(円墳・石棺系石室)



S167(円墳・石棺系石室)



S308(円墳・石棺系石室)



滑石製白玉・
ナツメ玉



鉄鏃・刀子

S121の副葬品

ガラス玉



鉄鏃

S167の副葬品



S168 周溝出土の土器